



2017年1月 第15巻第1号

かく語りき—聖人の言葉

「神の名は様々であり、近づくことのできる神の形は無限にある。どのような名と形の神を礼拝しようと、それを通じてお前は神を悟るだろう。」

(シュリー・ラーマクリシュナ)

「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」

(ヨハネによる福音書 15章 21節。『和英対照聖書 新共同訳』日本聖書協会、2001年)

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・2017年2月～3月の予定
- ・2016年12月の逗子例会

「ヒンドゥ教徒の見方でのイエス・キリスト」 スワミー・メーダサーナンダによる講話

- ・2016年クリスマス・イブ礼拝
- ・パドマ・ヨーガ・アシュラムでのサットサンガ
- ・西荻窪サットサンガ
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

今月の予定

- ・生誕日

スワミー・アドブターナンダ
2月10日(金)

シュリー・ラーマクリシュナ
2月28日(火)

スワミー・ヨーガーナンダ
3月16日(木)

- ・2017年3月の協会の行事

3月4日(土) 10:00～12:00

東京・インド大使館例会

講義：『バガヴァッド・ギーター』
(無料)

場所：インド大使館

お申込み・お問合せ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合

せ/

※入館・受講するには、大使館発行の ID カードが必要です。次回の ID カード 申し込みについては、3 月に上記のウェブサイトで発表されます。

3 月 5 日 (日)、12 日 (日)、26 日 (日)
14:00~15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：逗子本部別館

お問い合わせ：080-6702-2308 (羽成淳)

※体験レッスンもできます。

※専用ホームページをご覧ください：

<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

3 月 7 日 (火) 14:00~15:30

火曜勉強会

※予定変更がある場合は、協会のウェブサイトのトップページに記載されます。

場所：逗子本部本館

お問い合わせ&お申込み：

benkyo.nvk@gmail.com

3 月 10 日~15 日

スワミー韓国訪問

3 月 19 日 (日) 10:30~19:30

シュリー・ラーマクリシュナ生誕祝賀会

場所：逗子本部別館

06:00 マンガラ・アーラティ、朗誦、賛歌

10:30 礼拝 (プージャ)、アーラティ、

花奉献 (プシュパンジャリ)

13:00 昼食 (プラサード)

14:45 輪読、講話、賛歌、瞑想

15:45 特別音楽プログラム

ゲスト：インドのフルート演奏

16:30 お茶

18:00 夕拝、賛歌

皆様のお越しをお待ちしております。

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

※当日のご浄志は謹んでお受けいたします。

3 月 24 日 (金)

ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動

現地でのお食事配布など。

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

3 月 25 日 (土) 13:30~17:00

関西地区講話

場所：大阪研修センター

内容：「バガヴァッド・ギターとウパニシャッドを学ぶ」

※詳細は特別プログラムをご覧ください。

2016 年 12 月の逗子例会

「ヒンドゥ教徒の見方でのイエス・キリスト」

スワミー・メーダサーナンダによる講話

どの宗教の信者であるかに関わらず、霊的生活を実践し霊的に進んだレベル

にある人は、他の宗教において靈的に完成した人物について、自信を持って語り、評価することができるでしょう。しかし、こうした靈的偉人を信奉する信者らの間でも、いろいろな意見が見られます。これはどの宗教であっても同じです。今日はイエス・キリストについてお話をするのですが、キリスト教徒の間でも様々な意見があります。聖書を読んで評価することもできますが、キリスト教徒にはカトリックの人びと、プロテスタントの人びとがいて、さらに意見を異にする色々な宗派があります。また、特定の宗派に属していないけれども、自分をキリスト教徒だと見なし、特定の見方をする人もいます。このように、靈性の巨人に対する評価は同じではありません。

イエス・キリストとラーマクリシュナの伝統

イエスは実は東洋の人ですが、キリスト教は西洋で育まれてきました。ですから、東洋の人に対する西洋の見方ということになり、当然、そこには違いが生じます。また、様々な宗派が異なる意見を持っていますし、他にもいろいろな要素が絡んでいます。ですから、このような議論をする際には、評価の対象に対して、意見を述べる者がどのようなスタンスを取っているのか、はっきりさせる必要があります。イエスのような人に対して批評家のような態

度を取っているのでしょうか、それとも深い尊敬と理解を持っているのでしょうか。これは忘れてはならない重要な点です。尊敬の念と理解があることが明らかなのであれば、細かい点がいろいろと違っていてもあまり問題ではありません。



シュリー・ラーマクリシュナは、ドゥッキネッショルのカーリー寺院のご自分の部屋に、溺れかけているペテロをイエスが助ける場面の絵を飾っていらっしゃいました。当時、このようなことを正統なヒンドゥ教の祭司がするのは理解しがたいことでした。またラーマクリシュナは、聖書の朗読もよくお聞きになり、イエスに対して深い尊敬の念を抱いておられ、イエスのビジョンも見ておられました。このことはすべて記録に残っています。当時イギリスに支配されていたインドには、西洋のキリスト教宣教師がたくさん来ていました。カルカッタなどにはキリスト教会が建設されて人々に教えが説かれ、インド人はキリスト教をよく知るようになりました。進歩的な考えを持つヒ

ンドゥ教徒は、キリスト教徒ではなくてもキリスト教やイエス・キリスト、聖書についてかなりの知識を持っていました。キリスト教宣教師が運営する大学の中には、聖書を学ぶ授業が必須科目になっているところもありました。スワーミー・サーラダーナンダジーはこのような大学で学びましたし、他の直弟子や信者らのなかにも、イエスについてよく知っていたりイエスに対して大きな尊敬の念を抱いていたりする人がいました。ブラーフモー・サマージのリーダーの一人であったケシャブ・チャンドラ・センもイエス・キリストを強く信奉していました。

偶然のことですが、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダジー（スワーミージー）が率いる、ラーマクリシュナの出家の直弟子らが出家の最後の誓いを立てたのは、1886年のクリスマス・イブでした。後になってこのことを知った彼らは大変喜び、それ以来、毎年、ラーマクリシュナ・ミッションの本部であるベルル・マトと世界各地の支部でクリスマス・イブを祝っています。このクリスマス・イブのお祝いで、ある時、直弟子らは濃青の服を着たイエスのビジョンを見ました。現在、ベルル・マトのお祝いの様子は、夕拝の後、インターネット上でストリーミング配信されていますので、非常に美しいプログラムを誰もが見ることができます。はるか昔、まだ直弟子らが生きていて

ベルル・マトに古いメイン・シュラインがあった頃、信者さんたちはまだあまりたくさん来ませんでした。プージャというヒンドゥ教のやり方で、敬意を込めてクリスマス・イブの礼拝を行っていました。

ある時、カルカッタにあるキリスト教大学の関係者である二人のキリスト教司祭が、ラーマクリシュナ・ミッションのこの伝統について耳にし、クリスマス・イブの礼拝を見に来ました。プログラムをすべて見終わった後、二人は、「ヒンドゥ教のやり方でこのように礼拝を行うのは正しくない、きちんとカトリックのやり方で行うべきだ」と不満を述べました。これに対し、ミッションの僧侶達は何も答えませんでした。明らかに、この二人の司祭は、敬意と信仰心を以て礼拝を行っていることは認めようとせず、ただ儀式的な部分にだけ関心があったのです。儀式やその他の外面上のことは、礼拝で捧げられる愛や信仰心、敬意ほど重要ではありません。これは、このような儀式の場だけでなく、諸宗教の対話においても最も重視すべき点です。

ヒンドゥ教徒の中にも、進歩的な人もいれば排他的で原理主義的な意見を持つ人もいます。ヴェーダーンタでは、全ての宗教、全ての預言者が、同じ神様の異なる現れであると考えていますが、ヒンドゥ教徒全員がこのような考

え方をしているわけではありません。中には、クリシュナだけが信奉されるべきであるとか、何々という神様だけが礼拝されるべきだとか考え、他の預言者を全て重要ではないと見なす人もいます。ですから、今日私が「ヒンドゥ教徒」と呼ぶのは、ヴェーダーンタ的なリベラルな考え方をもち、他を受け入れる姿勢のある人のことです。このようなヒンドゥ教徒の見方では、イエスは偉大な霊的人格で、イエスだけでなく、ラーマチャンドラも、ブッタも、皆同様に、同じカテゴリーに属していると言えます。そのカテゴリーとは、類まれな人々、「神様の特別な現れ」である人々だけが属するグループです。国籍や宗教は関係ありません。ヒンドゥ教ではこのグループの人々を「アヴァターラ」と呼んでいます。アヴァターラの実の意味は「降下する者」ですが、一般には「神の化身」のことです。このようなアヴァターラには、一次的な印と二次的な印があります。

言葉の裏の深い意味

では、これからお話する「印」を基準として、イエスがアヴァターラと呼ばれるにふさわしいか考えてみましょう。キリスト教では、イエスを「神のひとり子」と呼んでいます。これは説明が難しいかもしれませんが、私の印象では、そして最もシンプルな説明では、私たちは皆神様の子供ですが、イ

エスは非常に特別な意味で神様の息子であり、これが「ひとり子」という言葉の解釈です。そして、この言葉を理解できるかどうかは、その人が霊的にどれだけ進歩しているかによります。霊的に進んでいる人程、このことを理解するのに必要な叡智の光を多く得ているからです。結局のところ、私たちが抱くイメージというのは非常に主観的です。ですからこのようなことを言葉で説明するのは非常に難しく、「神様の特別な現れ」としか言えません。

シュリー・ラーマクリシュナにまつわる話として、似たような例があります。ラーマクリシュナは、ラカール（スワミー・ブラフマーナンダジー）のことを「霊的息子 (spiritual son)」と呼んでいました。これがどういう意味であるか分かりますか？ 私たちには、文字通り「ラカールは霊的な意味で息子である」としか考えようがありません。ラーマクリシュナのこのような言葉を耳で聞き、目で読むことはできても、私たちにはそのわずかの意味しか理解することはできないのです。他の例を挙げてみましょう。ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィーが、ある時数人の僧侶に、体に巻く新しい布をプレゼントしました。皆がもらった布は綿でしたが、ブラフマーナンダジーだけは絹の布をもらったのです。一人がマザーに、「なぜこのように差別するのですか」と尋ねまし

た。「皆、あなたの息子ではないのですか。」これに対するマザーの答えは大変興味深いものでした。「皆、私の息子ですが、ラカールは『私の』息子ですから」と、「私の」という部分を強調されたのです。このように、ごく普通に聞こえる言葉の裏に、私たちには到底理解できない深い意味が隠れているのが分かりますね。

二次的印

では、ヒンドゥ教徒の観点から、アヴァターラの特徴と考えられている一次的印と二次的印という切り口で、イエス・キリストの人物像を描いてみましょう。まず二次的印ですが、これには奇跡の行いがあります。クリシュナの生涯を見てみると、赤子クリシュナが、邪悪な王カンサが送った悪魔らを殺すところがあります。他にも、クリシュナを殺すために手下を送るのですが、悪巧みはすべて失敗に終わり手下は殺されてしまいます。また、人々を洪水から救うために、子供のクリシュナがゴーヴァルダナ山を指一本で持ち上げました。このような超人的なことを子供がするなど信じがたい話で、アヴァターラの生涯にはこうしたことがたくさん起きます。しかし、このような業（わざ）の多くは、偉大なヨーギーも自然を操る力を以って為すことができます。マジシャンも、素晴らしいトリックを使って観客の目には本物のよう

に見える手品を行います。奇跡を行うことがヨーギーやマジシャンにもできるのであれば、奇跡がアヴァターラの主要な印であるとは言えません。単に二次的な印に過ぎないのです。

イエスも素晴らしい奇跡を行いました。私たちの見方では、それを以てイエスを「神様の非常に特別な現れ」とか、「神のひとり子」と呼ぶことはできません。では、このような奇跡の背後にはどのような動機があるか、という点から考えてみましょう。普通のマジシャンであれば、当然、その動機はお金です。ヨーギーの中にも、名声に目がくらんで奇跡を行う人がいます。このように、まず背後にある動機を考えてみる必要があります。次に、奇跡を行っている時の主体は誰か、ということです。マジシャンの場合は当然、「マジックをやっているのは自分だ」と意識しています。ヨーギーの場合も「超人的な力を見せているのは自分だ」と考えています。しかしアヴァターラの場合、例えばクリシュナは、動機は自分のためでなく、人々を邪悪な王から救うためでした。イエスの奇跡の行いで、お金や名声のために行われたものはひとつもありませんでした。さらにイエスは、「私がこれをやった」などと決しておっしゃいませんでした。特別な行いをした時にはいつも、感謝と栄光を神様に捧げていました。自分は単なる媒体に過ぎず、神様の御力が

自分を通して人々の苦しみを取り除いているのであり、皆、神様に感謝しなくてはならないとおっしゃいました。自分が主体であるという感覚は全くなかったのです。

ヒンドゥ教の靈的実践の観点からすると、奇跡は身を滅ぼすことになるので靈的求道者から嫌がられています。名声を手に入れたり、一時的なものを強く欲したりすることは墮落をもたらし、決して真理を悟ることができなくなります。このような理由で、ヒンドゥ教の靈的実践においては奇跡が嫌われているのです。しかし、神の化身や神のひとり子の場合は、これは当てはまりません。このような人たちは靈的求道者ではなく、すでに靈的悟りを得て高いレベルにあり、他者のために奇跡を行うからです。このような神様の特別な現れは、名声や個人的な利益のような一時的なものに影響を受けることはありません。

一次的な印

一方、一次的な印は、常に靈的意識の非常に高い状態にあることです。イエスとラーマクリシュナは同じカテゴリーの人と言えますから、この靈的意識の状態については『ラーマクリシュナの福音』を見てみましょう。『福音』の著者であるMさんは、ほんの一瞬でもラーマクリシュナが神様の意識から

それるのを見たことはなかったと言っています。イエスについては『福音』のような大量の詳細な記録がありませんが、同じだったと理解してよいでしょう。私たち自身が神様を意識している時間はどのくらいあるか、どれほど短く不安定か考えてみてください。瞑想中でさえも、私たちの意識は安定せず簡単に集中が途切れます。瞑想していない時には神様のことなど完全に忘れていきます。

また、一次的な印として、真実を貫くという点も挙げられます。シュリー・ラーマクリシュナの生涯を見てみると、言葉でも考えでも行動でも常に真実を実践するよう細心の注意を払っていたことが分かります。イエスはどうか。命が危険にさらされている時に、救われたい一心で真実から離れることがあったでしょうか。イエスの最愛の弟子ペテロでさえ、恐怖心からイエスを知らないと言いましたが、イエスは真実を貫きました。ペテロがイエスのために自分の命を捧げると誓った時、イエスはペテロに言いました。「はっきりしておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」（マタイによる福音書 26 章 34 節。『和英対照聖書 新共同訳』日本聖書協会、2001 年。以下同じ）虚勢を張っていたのだということが分かりますね。イエスの偉大な直弟子のような、靈的レベルの高い人で

さえも、死の恐怖にさらされて弱められ、真実を貫くことができないのです。「神のひとり子」は、命の危険に直面しても譲ることなく真実を貫けます。イエスは「お前がイエスか」と尋ねられた時、自分の運命を知っていながら偽ることなく、「はい」と答えたのです。普通の人のように逃げるところか、真実はイエスに恐れを知らぬ力を与えました。

一次的な印の三つ目は、霊的知識です。アヴァターラからは、最も高いレベルの霊的知識が溢れ出てきます。イエスの言葉はほんの少ししか記録されていませんが、わずかに記録されたその言葉に霊的叡智が満ち溢れていることは、説明の必要がありません。『福音』や『バガヴァット・ギーター』と同じく、イエスの言葉の中にあるのは、ただ霊的叡智、混じりけのない純粋な霊的叡智、霊性のための霊性です。このような深い霊的叡智の言葉の例として、「神の王国はあなたがたの間にあるのだ」（ルカによる福音書 17 章 21 節）、「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書 22 章 39 節）などがあります。

懲らしめと慈悲

さらに、誰に対してでも、特に苦しんでいる人々に対して計り知れないほどの無限の愛を持っていることも印の一

つです。普通の人には家族や友人のために愛を使い果たしてしまっていて、他人へ差し出す分はもう残っていないかのようなのです。しかしアヴァターラは、誰をも包み込むかのように愛し、その愛には限りも区別もありません。そして、墮落した者に対するアヴァターラの慈悲も同様です。私たちは善人と悪人、聖者と罪人を区別しますが、アヴァターラは区別せず、むしろ墮落した者に対して、より大きな慈悲を抱きます。この点について、イエスは深みのある言葉を述べています。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マルコによる福音書 2 章 17 節）このように神様が現れるのは、聖者のためではなく、病人、墮落した者のためであり、彼らが正しい人間になれるようにするためなのです。ラーマクリシュナの有名な信者のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、ラーマクリシュナのアヴァターラたる性質について、同様の考えを述べています。

『ギーター』の考え方の一つに、神様は邪悪な者を懲らしめ聖者を救いに来る、というのがあります。しかし邪悪な者も神様の子どもではないでしょうか。つまり、神様は邪悪な者を懲らしめるためではなく躰けるために来るのです。今生ではダメでも来世で、邪悪な者が自らを正せるようにするので

す。また、ドゥルガー母神はチャンディとして悪魔を滅ぼしにやって来る、という考え方もあります。聖者らはドゥルガーへの賛歌でこう歌っています。「母よ、あなたの何と偉大なことか！一方の手では我らをお守り下さり、もう一方の手ではあなたが殺す悪魔らに慈悲をおかけになる」これはどういうことでしょうか。チャンディ母神が自ら悪魔を殺すとき、悪魔は地獄ではなく天国に行くのです。慈悲の表し方には、私たちが通常考える神様のお慈悲とは随分違うやり方があるのです。

先ほど聖書で読んだところでは、イエスが墮落した者らに対しとりわけ慈悲心を持っているのが分かりました。姦通の罪を犯した女性の話があります。村人がこの女性を石打ちの刑にしようとした時、イエスはこう言いました。「あなたがたの中で罪を犯したのではない者が、まず、この女に石を投げなさい。」（ヨハネによる福音書8章7節）幸いなことに、村人らは内省し、今にも石を投げようとしていたのをやめ、一人、また一人とその場を去りました。その場にいた誰もが、何らかの罪を犯したことがあったのでしょうか。そして皆、それについて正直でした。最後にイエスはこの女性に対して、もう罪を犯してはならないと言いました。この女性がマグダラのマリアであるかどうかははっきりしていませんが、イエスの非常に熱心な弟子になりました。

他の印

アヴァターラはまた、他の人の考えている事が分かります。イエスは、人が何を考えているか、本当の事を言っているかどうか分かりました。また、誰かの過去、現在、未来を言い当てることもできました。ラーマクリシュナも同じだったことが『福音』の記述から分かりますね。聖書の中でイエスはこう言っています。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」（ヨハネによる福音書8章58節）イエスはまた、洗礼者ヨハネがかつてエリヤとして現れたと述べています。このような言葉から、イエスには自分や他人の過去が分かったのだということが窺えます。『ギター』でも、クリシュナがアルジュナに対し、二人ともいくつもの過去世があるがアルジュナはそれを覚えておらず、自分は全て覚えているとおっしゃっています。

神の化身は平安を与えて下さいます。神の化身が、心に平安のない多くの人々に平安を与えた例は数多くあります。私たちが心に安らぎを得られるよう、神の化身は苦しみの源を正しにやって来るのです。イエスはこう言われました。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなた方は安らぎを得られる。わたしの

軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（マタイによる福音書 11 章 29-30 節）普通のヨーギーや僧侶にはこのようなことはできません。自分の心配事や悲しみを背負っているのに、他の人の重荷を取り除くことなどどうやってできるでしょうか。

アヴァターラが救いを与えに来る人々には、二通りあります。苦しんでいる人々と霊的求道者です。アヴァターラは、霊的な道を示しにやって来ます。アヴァターラの生涯には、求道者に対して悟りへの道を示す手本となることがたくさんあります。求道者も苦しんでいる人々なのですが、普通とは違い、霊的成就をゴールとしています。例えば、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子らは悟りを求めていましたから、ラーマクリシュナが悟りへの道を示しました。イエスの山上の垂訓は、全てを放棄した近しい間柄の弟子らに対する、最も高い霊的指導の例です。

アヴァターラは人々に解脱を与えます。イエスが、人は「天国に行き神と共にいる」とおっしゃいましたが、これはヒンドゥ教徒にとっては解脱の状態に思えます。このような神様の特別な現れだけが、他人を解脱させる力があるのです。ヨーギーの中にも、悟りの高い状態にあって、わずかな人々を解脱させることができる人がいます。しかし、このようなヨーギーは手漕ぎ

の小舟のようなものです。一方、神の化身は大海を渡る外洋船のように何十万人もの人々にこの世という海をわたらせることができるのです。

神様の特別な現れである人々には素晴らしい特徴が色々あります。彼らには全くエゴがありません。「私はどうということのない存在だ。私は神様の道具で、神様が私を使っただけなんだ」とか、「神様が、私を通じて働いていらっしやるのだ」という態度を常に取ります。シュリー・ラーマクリシュナはよくこうおっしゃいました。「マー（母神）よ、私は機械でああなたが機械の運転者だ。」聖書には、イエスが「私が称えられるべきなのではない。神を褒め称えなさい」とおっしゃる例がたくさん出ています。これは、「もし癒されたのなら、私ではなく神様を褒め称えなさい。その力は私の力ではなく神様の力である」という意味です。

特別な二つの印

神の化身の印にはもう二つあります。まず、生きた時代や場所に関わらず、亡くなった後もその影響は大きさを増していき、その教えは広がり続けることです。特定の時代や場所に限定されることはありません。どの文化や伝統にも聖者やヨーギーは沢山いますが、いったい何人が後の世の人々に知られ

ているでしょうか。イエスやシュリー・クリシュナ、ブッダなどのことを考えてみると、彼らが生きたのは遙か昔のことですが、彼らは今なお忘れ去られていないというだけでなく、彼らの影響は今も存在し広がり続け、世界を包み込んでいます。普通の僧侶や霊的な人々では、このようなことは起こりませんね。

そして最後に、神の化身の重要な印として言えるのは、彼らの主な目的は霊性ですが、彼らを与えた影響は道德面、宗教面に止まっていないということです。芸術、建築、文学、文化などにも素晴らしい影響を与えています。ブッダやイエスの影響は、文学、音楽、彫刻、絵画、建築などに残っていますね。イエスが西洋文化に与えた影響を取り除いたとしたら、西洋文明の古典文化はいったいどのくらい残るでしょうか。同様に、ブッダやクリシュナ、ラーマなどの影響を除いたら、インドの古典文化はほんのわずかしかないでしょう。

これは、実に驚くべきことです。このようなアヴァターラらは主に宗教的な人物ですが、与えた影響は広範です。比類のない、まさに特別な影響ですね！

神様の極めて特別な現れであるイエス

このように、ヒンドゥ教徒から見ると、イエス・キリストが「神のひとり子」であるという考え方は、イエスが神様の特別な現れ、神の化身であるという意味で解釈すると納得できる考えだと言えます。

どうもありがとうございました。



2016年クリスマス・イブ礼拝

12月24日（土）午後7時、毎年恒例のクリスマス・イブ礼拝が逗子本部で開催されました。礼拝の儀式、新約聖書の輪読、キャロルの斉唱の後、上智大学博士課程で祈りについて研究されている敬虔なカトリック信者のレオナルド・アルヴァレスさんが「イエス・キリストのメッセージ」をテーマにお話をされました。当時の時代背景が詳しく説明され、イエスの教えの重みがよく分かりました。

その後本館に移動して夕食のプラサードを皆でいただきました。参加者は約40名でした。





パドマ・ヨーガ・アシュラムでのサットサンガ 平野久仁子さん寄稿

2016年12月4日（日）午後2時15分より4時45分まで、東京都千代田区のお茶の水駅近く（エムワイ貸し会議室）に於いて、マハーラージを講師にお招きして、パドマ・ヨーガ・アシュラム主催の研修会を開催致しました。

テーマは「ヴェーダーンタの実践法をめぐって」で、参加者は23名でした。



パドマ・ヨーガ・アシュラムではこれまで、ほぼ毎年1回、マハーラージをお招きして研修会を開催してきましたが、今回は13回目でした。マハーラージはご講義をいつものようにヴェーダのお祈りから始められました。ヴェーダーンタとはヴェーダのエッセンスであり、ブラフマン・宇宙・アートマンについての真理およびそれらの関係について説いており、それを学ぶ目的、そして実践（識別と真理を集中して考える）をするために必要な準備（心や感覚のコントロール等）等について、時折ユーモアを交えながら、わかりやすい日本語でご講義されました。

その後の質疑応答の際は、参加者から一人一言ずつ語る形となり、「お話を伺って、心が軽くなりました。」「ギャーナ・ヨーガは難しいと思っていま

したが、今日のお話で理解しやすくなりました。」「本当のパワースポットは自分の中にある、というマハーラージの言葉がとても印象的でした。」等、色々な感想が出されました。そして最後には再びマハーラージの指導による瞑想が行なわれ、終了となりました。



西荻窪サットサンガ

12月11日（日）、東京・西荻窪で開催されたヨーガグループの忘年会で、マハーラージは「瞑想」をテーマに講話を行いました。主催は、カルチャーセンターなどでハタヨーガ講座を行っ

ているオリエンタルアプローチの廣澤貴子さんで、参加者は28名でした。同グループではヨーガのアーサナ（坐法）だけでなく瞑想の実践会も定期的に行っており、瞑想法の教材としてスワミー・メーダサーナンダの講話の本も使っているようです。以下は、廣澤さんからいただいたレポートからの抜粋です。



「マハーラージは私たちに、幸せを得るためには瞑想を実践する時間が必要なので、その時間を本当に作れるかどうか聞かれました。幸せのために必ず実践すると自分にコミットメントすることが大切ということでした。そして、瞑想の具体的な方法やタイミング、環境、準備、どうしたら続けていけるか、そして必ず結果が出てくるということまで教えてくださり、希望と励ましになる力強いエールを送ってくださいました。参加者の方からは後日、『意識が変わり前向きになれた』『瞑想が楽しくできるようになった』など多くの

感想をいただきました。」

忘れられない物語

バアル・シェム・トーブと医者

ある時、有名な医者が道で患者に会った。医者は挨拶も交わさずにこう言った。「足が治るまで歩いてはいけないと言っただろう！」

「でも、治ったんです」と患者は答えた。

「そんなはずはない。私は足の傷を診たんだ。治るのに数ヶ月はかかるだろう。」

「先生、私はヒーラー（治療師）の所に行ってみたんです。神秘主義のラビ（ユダヤ教聖職者）で、バアル・シェム・トーブという方です。」

医者は怪訝な顔をすると、その場を去った。1週間後、医者はバアル・シェム・トーブの家のドアをドンドンと叩いた。ドアが開くと医者は言った。「君は、自分をヒーラーだと言っているそうだな。」

バアル・シェム・トーブは答えた。「友よ、ヒーラーなのは神である。さあ、お入りなさい。」

医者は動かなかった。「お互いを診察しようじゃないか。相手の病気を正しく診断した方が、良い医者だという証拠だ。」

バアル・シェム・トーブは微笑んだ。「お望みなら、そうしましょう。だが、お願いだ、中に入ってください。」

家の中に入ると、医者はバアル・シェム・トーブを診察し始めた。つついたり、つねったり、耳の中を覗き込んだり、膝を叩いたりしながら、1時間が過ぎた頃、医者は言った。「君には悪いところはなさそうだ。」

「悪いところが見つからなくても、別に驚きはしません。私は、神の存在を直接経験したいと願うあまり、存在を感じることができないとハートが痛み叫び声をあげるのです。私の病気といえば、このように神を強く求めて止まないことですから。」バアル・シェム・トーブは医者をしばらく見つめた。「では、今度は私があなたを診察しましょう。」

バアル・シェム・トーブは医者の手を取り、耳の中を覗いて、最後にこう言った。「何かとても大切なものを失くしたことはありませんか。」

「実はね、大きな宝石を持っていたんだが盗まれてしまったんだよ」と医者
は言った。

「ああ、分かった！あなたの病気はそ
れです。」

「何だって。ダイヤモンドを惜しんで
いることかい。」

「そうではありません。私の病気は神
への渴仰心ですが、あなたの病気は渴
仰心を忘れてしまったことです。」

医者は息を呑んだ。次の瞬間、涙が頬
を伝わり始め、とめどなく流れ落ちた。
バアル・シェム・トーブの手を握った
まま、医者はしゃくりあげながら言っ
た。「どうしたら渴仰心を持てるか、
どうぞ私に教えてください。」

バアル・シェム・トーブは言った。「神
のお力添えにより、あなたは 治り始め
ています。」

(出典：

<http://www.hasidicstories.com/>、

Doug Lipman)

今月の思想

「現実には単なる幻想に過ぎない。非常
にしつこい幻ではあるけれど。」

(アルベルト・アインシュタイン)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp